様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ４ 月 ２７ 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０３７３

研究課題名（和文）グラン＝ギニョル劇に見る科学と文化の相互的影響

研究課題名（英文）The mutual influence between science and culture in Grand-Guignol Theater

研究代表者
真野　倫平（Mano, Rimpei）

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：３０２５７２３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、20世紀初頭にフランスで誕生した恐怖演劇であるグラン＝ギニョル劇に対する諸科学の影響を解明することで、科学と文化の相互的影響を明らかにすることを目的にする。具体的な成果としては、まず、グラン＝ギニョル劇の関連資料ならびに同時代の科学に関連する資料を国内外の書店から購入した。また、毎年夏季休暇にフランスへ国外出張を行い、フランソワ・ミッテラン国立図書館などで資料調査を行った。以上の研究に基づき、毎年度末に研究成果の一部を『南山大学ヨーロッパ研究センター報』に論文として発表した。

研究成果の概要（英文）：In this research, we elucidated the influence of various sciences on the Grand-Guignol drama, a horror theater born in France in the early 20 th century, to clarify the mutual influence of science and culture. First, we purchased materials related to Grand-Guignol play and materials related to contemporary science from domestic and foreign bookstores. Next, we made a business trip abroad to France on summer vacation every year, and conducted a document survey at the Francois Mitterrand National Library etc. Finally, based on the above research, we published a part of the research results at the end of each year as a paper in "Bulletin of the Nanzan Center for European Studies".

研究分野：仏文学

キーワード：仏文学　演劇　科学史

１．研究開始当初の背景

（１）グラン＝ギニョル劇とはフランスのベル・エポックの時期に制作された恐怖演劇のことである。このジャンルはこれまで、日本はもとより本国フランスにおいても周縁的なジャンルとみなされ、アカデミックな研究はほとんどなされてこなかった。申請者はこの未開拓のジャンルに注目し、平成 22 年 11 月に水声社より自身の編訳による『グラン＝ギニョル傑作選　ベル・エポックの恐怖演劇』を刊行し、日本における最初の本格的な紹介を試みた。さらに平成 23 年度～平成 25 年度の科学研究費の挑戦的萌芽研究「グラン＝ギニョル劇とベル・エポックの科学」において、グラン＝ギニョル劇と同時代の諸科学――医学、心理学、犯罪科学、細菌学など――との関係について研究を行い、その成果を論文として発表した。

（２）グラン＝ギニョル劇は同時代の諸科学と密接な関係を持ち、関連分野は医学、心理学、細菌学、衛生学、民族学、人類学、犯罪科学、心霊科学などきわめて多岐にわたる。現在までのところ、医学と心理学、犯罪科学、細菌学の領域については研究をある程度進めることができた。しかし、その他の心霊科学、奇形学、人類学等の領域についてはまだ十分な検証を行うにいたっていない。その意味で、さらに対象とする科学の領域を広げ、このジャンルとの関連をより網羅的に検証する必要があると判断した。

（３）また、グラン=ギニョル劇を同時代の全体的なエピステーメーの中で把握するためには、このジャンルを同時代の社会的・政治的状況の中に置き直す必要がある。とりわけ、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて大きな発達を遂げた大衆ジャーナリズムの発展について、重点的に研究する必要がある。これらの大衆新聞や雑誌は、グラン＝ギニョル劇の重要な発表母体になったのみならず、その主張な観客層であるブルジョワの心性に大きな影響を与えたことからも、重要な研究対象と考えられる。

２．研究の目的

（１）本研究の目的は、20 世紀初頭にフランスで作られた恐怖演劇であるグラン＝ギニョル劇に対する諸科学の影響を解明することで、同時代における科学と文化の相互的影響を明らかにすることにある。近年の文学研究は、文学作品を文学史という狭い枠組みで把握するのではなく、より広い視野において同時代の包括的なエピステーメーの一環としてとらえる方向に進んでいる。その意味で本研究もまた、文学・科学・歴史・社会などの複数の分野を横断する学際的な研究と考えられる。

（２）申請者は数年前よりこのジャンルの研究に従事しており、同時代の医学・精神医学・犯罪学などの諸科学との関係を検証してきた。とはいえさらに対象領域を拡大することで、20 世紀初頭の総体的な知のありかたをより網羅的なかたちで把握することが可能になるはずである。

（３）さらに、グラン＝ギニョル劇がしばしば掲載された、当時の大衆メディアのあり方を検証する。当時急速な発達を遂げた大衆ジャーナリズムは、読者に新たな科学的・政治的・法的知識を与えることで、同時代のブルジョワの心性に大きな影響を与えた。これらの大衆的メディアが好んで取り上げた犯罪・狂気・病気・異民族・下層階級といった主題は、グラン＝ギニョル劇の特権的主題でもあった。それゆえに、当時のジャーナリズムやルポルタージュを分析することによって、グラン＝ギニョル劇の主要な観客層である同時代のブルジョワの無意識的な関心のありかについて、より深く理解できるはずである。

３．研究の方法

（１）資料の収集に関しては、まず、グラン＝ギニョル劇に関する関連文献、および演劇に関する研究書を入手する。このジャンルの主要作家であるロルド、メテニエ、モレー、ルヴェル、メレ、フランシュヴィルらの著作は今日ではほとんど絶版となっており、これらについては古書を購入するか、あるいはフランス国立図書館に複写を依頼する。また、当時のプログラムやポスターについても、総合芸術としてのグラン=ギニョル劇を知るうえで不可欠な資料であるため、可能なかぎり入手に努める。

（２）次に、同時代の諸科学に関する資料を入手する。とりわけヒステリー研究で著名なジャン＝マルタンシャルコーや、グラン=ギニョル劇の作者でもあったアルフレッド・ビネの著作を入手する。これについても図書を書店あるいは古書店で購入するほか、フランス国会図書館に複写を依頼する。さらに、新聞・雑誌といったジャーナリズム関連の資料、ならびにジャーナリズム研究関連資料についても、同様の方法で入手する。

（３）また、定期的にフランスに調査出張を行い、フランス国立図書館をはじめとする各図書館で調査を行う。上記に挙げた資料は日本では閲覧不可能なものがほとんどであり、現地図書館での資料調査は欠かすことができない。さらに、医学博物館、警察博物館、人類博物館といった、科学史と関連の深い博物館・美術館においても資料調査を行う。並行して、フランスの文学・演劇研究者と定期的に打合せを行い、情報交換を行う。

（４）コンピュータを用いて以上の資料や情

報を整理する。さらに、研究成果の一部をまとめて、グラン＝ギニョルと科学の関係について論文を執筆する。最後に、年度末にそれを関連誌に発表する。

４．研究成果

（１）資料の収集に関しては、グラン＝ギニョル劇の基本文献ならびに同時代の諸科学に関する文献を集めることができた。なかにはプログラムやポスターといった視覚的資料も含まれる。フランスへの調査出張においては、フランス国立図書館等においてグラン＝ギニョル劇や同時代の科学に関する資料ならびに新聞・雑誌といった当時のジャーナリズム関連の資料を調査することができた。また、アニェス・ピエロン氏、フレデリック・ジェシュア氏といったフランスの文学・演劇研究者と面会し、情報交換を行うことができた。

（２）以上で収集した資料にもとづき、グラン＝ギニョル劇と同時代の諸科学――医学、精神医学、心理学、奇形学など――との関係について研究を行った。その研究成果を、雑誌論文として関連誌に発表した。これによって、文学・科学・歴史・社会などの複数の分野を横断する学際的な研究として一定の成果を上げることができた。またこの研究を通じて多くの研究者と交流の機会が得られたことは、諸科学の領域に関する知見を広げるうえできわめて有意義であった。

（３）具体的には、グラン＝ギニョル劇における身体イメージについて、当時の医学や精神医学における身体像の影響を検証した。まず、グラン＝ギニョル劇における怪物的身体という主題に注目し、ヨーロッパにおける怪物的身体の受容、とりわけ奇形学の発達や近代における「怪物」概念の変貌をたどりつつ、同時代の身体像がどのようにこのジャンルに反映しているかを検証した。その際、ミシェル・フーコーの医学史研究を参照するとともに、サーカスの見世物や映画など同時代の周辺ジャンルとの比較を行いつつ、考察を行った。

（４）さらに、グラン＝ギニョル劇におけるもう一つの重要な身体的イメージである、痙攣的身体という主題に注目した。19 世紀以降の精神医学における異常者像の変遷、さらにシャルコーのサルペトリエール病院における臨床講義の影響などを分析することで、神経症的症状をもつ痙攣的身体が、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのブルジョワ社会における強迫観念のひとつであることを明らかにした。フーコーやサンダー・L・ギルマンの身体研究を参照しつつ、19 世紀のモレルやリュカの変質論やユリッス・トレラの狂気論の影響について分析を試みた。

（５）並行して、19 世紀後半から 20 世紀初頭における大衆ジャーナリズムの発達について研究した。とりわけ、両大戦間に徒刑場、軍隊徒刑場、精神病院、売春組織、植民地などについてルポルタージュを発表したジャーナリスト、アルベール・ロンドルの仕事に注目した。これらはいずれもグラン＝ギニョル劇の重要な舞台であり、そのことはグラン＝ギニョル劇の主要な観客層である同時代のブルジョワ階級の関心がこれらの方面に向いていたことを示している。それゆえにこれらのジャーナリズムの対象を分析することは、同時代のブルジョワ階級の関心のありかを探るうえできわめて有効である。

（６）さらに、文学・演劇作品、科学的著作、ジャーナリズムやルポルタージュ、これらの領域を「現実の記述」という観点から統一的に分析するための方法論について考察した。フィクション／ノンフィクションという区分を超越し、文学と現実の関係を包括的に考察するためには、従来のテクスト分析とは異なる理論的な枠組みが必要である。このような点で、現代における気鋭の歴史家であるイヴァン・ジャブロンカの『歴史は現代文学である』に注目した。同書では、狭義の歴史のみならず、ルポルタージュやドキュメンタリーといった現実を扱うテクスト一般と、文学的フィクションとを同時に扱えるような新たな理論的枠組みが提案されている。その意味でこの理論は、文学・科学・歴史・社会などの複数の分野を横断する学際的な研究を目指す本研究に対して、有益な示唆を与えるものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 真野倫平、イヴァン・ジャブロンカにおける歴史記述の問題について、南山大学ヨーロッパ研究センター報、査読無、第 24 号、2018 年 3 月、pp．51-62．

② 真野倫平、アルベール・ロンドルと両大戦間のジャーナリズム、南山大学ヨーロッパ研究センター報、査読無、第 23 号、2017 年 3 月、pp．87-99．

③ 真野倫平、グラン＝ギニョル劇における痙攣的身体、南山大学ヨーロッパ研究センター報、査読無、第 22 号、2016 年 3 月、pp．103-117．

④ 真野倫平、グラン＝ギニョル劇における怪物的身体、南山大学ヨーロッパ研究センター報、査読無、第 21 号、2015 年 3 月、pp．1-14．

〔図書〕（計１件）

① 真野倫平　他、行路社、近代科学と芸術創造　19～20 世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係、2015、451

６．研究組織

(1)研究代表者

真野　倫平（MANO, Rimpei）
南山大学・外国語学部・教授
研究者番号：３０２５７２３２